

ちかい

荒田小学校 五年 田中 啓太

八月十二日、ぼくは母と新幹線で広島に向かった。よく日の十三日に行われる兄の野球の大会を応援するためだ。

開会式が広島にある呉市の二河球場で行われた。とても大きな球場を堂々と一糸みだれずに行進する兄やチームメイトのすがたを見ていたら、ふいに先日読んだ南日本新聞の南風録に書かれていた一文を思い出した。

「若い特攻隊員がキャッチボールをしていた『ストライク』『ボール』と十球ぐらい投げ合って『よし。』と言ひ残し、そのまま出過ぎして行った。」というものだ。兄たちと同じ年くらいの中学生や高校生は、戦争に行く前、どんな気持ちでキャッチボールをしたのだろうか。死を覚悟して、たがいに「さようなら。」「がんばれよ。」の気持ちを含めてボールを投げ受け止め合ったのだろう。平和で何不由なく野球を楽しんでいる兄やぼくたちには想像もできないことだと思つた。

兄の応援を終えた十五日には、呉市の観光をした。呉は、ぼくのひいじいちゃんがいたところだ。ひいじいちゃんは、海軍に所ぞくして、軍かんに乗っていたそうだ。そして、戦争に行つたまま帰らなかつたのだ。

ぼくは、ひいじいちゃんが乗っていた軍かんを見に、母と大和ミュージアムに行った。いろいろな軍艦のもけいを見ていると、会つたこともないひいじいちゃんの顔がうかんできた。ひいじいちゃんたちを乗せたまましずんだ軍かんたち。かっこいいもけいばかりだった。ぼくにはとても悲しく切ないものに見えた。

「今日は、終戦記念日です。もくとうをささげましょう。」
館内放送があり、サイレンが鳴つた。ぼくは目を閉じて、ひいじいちゃんや、戦争でなくなつた人たちに「平和な時代をありがとうご

ざいます。」と感謝の祈りをささげた。

次に、ひいじいちゃんが通つていた海軍士官学校のあつた江田島へフェリーでわたつた。すっかり日が暮れ、島の向こうにきれいな夕日が見えた。七十年前、きっとぼくのひいじいちゃんも同じ夕日を見ていたんじゃないかと思う。

戦後七十年、日本は平和になり、一度も戦争をしていない。それは、ぼくのひいじいちゃんたちのような戦争でなくなつた人や苦しんだ人たちを二度と出してはならないという反省からだと思う。どんなことがあつても、戦争はしてはならない。これからも楽しく野球が精一杯できるような日本、いや世界であつてほしい。

しずむ夕日を見ながら、

「ぼくたちは決して戦争を起こしません。」
そう、ひいじいちゃんに心の中でちかつた。